| 禁転載複製 |
| --- |
| 当日配付 |
| 試験終了後公開 |

D16

「中央職業能力開発協会編」

# 令和７年度 技能検定
# ３級 機械検査 学科試験問題
# (機械検査作業)

1. 試験時間　１時間
2. 問題数　30題
3. 注意事項
   (1)　係員の指示があるまで、この表紙はあけないでください。
   (2)　答案用紙(真偽法用)に検定職種名、作業名、級別、受検番号、氏名を必ず記入してください。
   (3)　係員の指示に従って、問題数を確かめてください。それらに異常がある場合は、黙って手を挙げてください。
   (4)　試験開始の合図で始めてください。
   (5)　解答の方法(真偽法)は次のとおりです。
   イ.　一つ一つの問題の内容が正しいか、誤っているかを判断して解答してください。
   ロ.　答案用紙(マークシート用紙)へ解答する際は、答案用紙に記載されている注意事項に従ってください。
   ハ.　答案用紙の解答欄は、試験問題の題数に応じて解答してください。解答欄は100題まで解答できるようになっています。
   (6)　電子式卓上計算機その他これと同等の機能を有するものは、使用してはいけません。
   (7)　携帯電話、スマートフォン、ウェアラブル端末等は、使用してはいけません。
   (8)　試験中、質問があるときは、黙って手を挙げてください。ただし、試験問題の内容、漢字の読み方等に関する質問にはお答えできません。
   (9)　試験終了時刻前に解答ができあがった場合は、黙って手を挙げて、係員の指示に従ってください。
   (10)　試験中に手洗いに立ちたいときは、黙って手を挙げて、係員の指示に従ってください。
   (11)　試験終了の合図があったら、筆記用具を置き、係員の指示に従ってください。

1　日本産業規格(JIS)の「計測用語」によれば、機器のドリフトとは、測定器の特性の変化による、指示値の連続的又は漸進的な経時的変化をいう。

2　目量とは、表示測定器の目幅に対応する測定対象量の大きさのことである。

3　日本産業規格(JIS)によると、ダイヤルゲージの長針は、プランジャを押し込むときに時計方向に動かなければならないと規定されている。

4　鋼製のブロックゲージは、測定が終わったらすぐ密着を取り外し、防錆油を塗布後に格納する。

5　ブロックゲージは、マイクロメータなどの基準として校正に使われる。

6　日本産業規格(JIS)によれば、Vブロックは、V面の角度90度のものについて規定されている。

7　外側マイクロメータは、アッベの原理に従っていない計器である。

8　ノギスは、外側マイクロメータに対してほぼ2倍の指示値の最大許容誤差を持つ。

9　サインバーの等級は、その精度によって1級、2級及び3級の3等級とされている。

10　日本産業規格(JIS)によれば、精密水準器の等級は、その性能によってA級及びB級の2等級が規定されている。

11　円筒部品の長さを測定する場合は、サインバーを使用する。

12　三針法によっておねじを測定すると、ねじの外径を求めることができる。

13　日本産業規格(JIS)によれば、間接検査とは、供給者の検査システム及び提出された検査結果を評価し、試験することによる合否判定検査のことである。

14　ラジアルボール盤のアームの旋回運動とベース上面との平行度は、ダイヤルゲージで測定する。

15　パレート図は、項目別に層別して、出現頻度の大きさの順に並べるとともに、累積和を示した図である。

16　$\overline{X}$-$R$ 管理図の$R$ は、試料の中央値のことである。

17　ねじのつる巻線に沿って軸の回りを一周するとき、軸方向に進む距離のことをピッチという。

18　バックラッシとは、歯車の逆転を防止するための装置である。

19　モジュール5mm、歯数30枚の標準平歯車の基準円直径は、35mmである。

20　旋盤におけるベッド上の振りとは、ベッドによって制限される工作物の最大直径のことである。

21　ホブ盤は、ホブという工具を用いてキー溝を加工する機械である。

22　タップは、めねじを立てる工具である。

23　機械構造用炭素鋼鋼材の記号S20Cの20は、引張強さを表す。

24　同じ体積のアルミニウムと鉄では、アルミニウムの方が重い。

25　表面硬化の方法には、浸炭焼入れや窒化等がある。

26　図面で半径を表すには、寸法数字の前にφを付記する。

27　電圧(V)は、抵抗(R)×電流(I)で求められる。

28　交流電圧は時間と共に刻々と電圧の瞬時値が変化している。

29　労働安全衛生法関係法令によれば、研削といしの周囲とワークレストとの間隔は、調整しておく必要はない。

30　クレーンは、その定格荷重を2t、5tなどと表示しているが、設計においては十分な余裕をみているので、使用に当たっては、定格荷重の1.5倍までは荷重をかけても差し支えない。